



観光施設メディアラボ

公益社団法人国際観光施設協会編

「海から見る東京、海を見る東京」

国際観光施設協会 建築部会

崎山 茂

「海から見る東京、海を見る東京」

かつての江戸は世界でも有数の水運都市でした。水産物だけではなく、木材や地方からのいろいろな産物が動脈のように細かく巡らされた水路を介して運ばれていました。都心に「～橋」など水にちなんだ地名が多いのはその名残です。しかし、多くの水路や内陸河川は関東大震災や空襲の瓦礫の捨て場となったり、先のオリンピック前の急速な都市近代化で道路にされたりして消滅してしまいました。

2016年から私たち国際観光施設協会建築部会は、まちふねみらい塾に協力をいただいて東京の水辺を探る試みを始めました。東京では忘れられてしまった水辺の魅力を再発見し、観光資源として生かせないか、と考えました。船の上から街を見るセミナーツアーを既に3回行なっています。

2016年7月に行なわれた第1回水上セミナーでは、天王洲を出て南に向かい、羽田沖で折り返してレインボーブリッジ、築地沖を通過して浅草吾妻橋まで、東京の街並みを普段とは逆に東京湾側から見ながら北上しました。羽田がハブ空港として重要性を増す中で、空港と都心をつなぐルートとして水上交通を生かす可能性をまちふねみらい塾では探っています。羽田の船着き場の位置を工夫すれば築地付近まで20分ほどしかかからないそうです。来訪者が最初に見る東京の姿が湾岸エリアからというのは東京の第一印象を大きく変えるでしょう。羽田から都心への途上で野生の水鳥の群れるさまを見られたらさぞ楽しいだろうと想像させられました。羽田沖からレインボーブリッジまでは貨物船のコンテナヤードなどの港らしい風景が遠目に連なります。さらに北上するにしたがって水路の幅は狭くなり、都市的な風景に変わっていきま



す。江戸末期の砲台跡だったお台場の石積みは今見ても美しく歴史を感じさせると共に、周囲の浅瀬や緑地となじんで鳥や小生物の格好の棲み処となっているようです。

レインボーブリッジをくぐると左岸に芝浦、日の出、竹芝の客船埠頭、右側に豊洲市場や晴海埠頭を臨む広い水面が現れます。その奥に浜離宮、築地市場、さらに勝鬃橋と続き、そこまで至るともう「湾岸クルーズ」というよ

り隅田川の「川のぼり」と言うほうがふさわしく、ここから先は背の低い船しか入れません。

レインボーブリッジが東京の海のゲートとして意味を持つと同時に、その奥の築地と対岸の豊海が「海のターミナル」として重要になることが分かります。まちふねみらい塾では、築地再開発と共に豊海に海外からの大型ヨットの停泊地をつくることを「築地ターミナル構想」として提案しています。

2017年11月に開催した第2回水上セミナーは、小さな船に乗り換えて内陸の細い河川を巡るクルーズでした。日本橋の船着き場から遡上して神田川との分岐点まで至る日本橋川には江戸時代の外濠の面影が見え隠れします。地上を歩いてはほとんど気づくことはありませんが、橋のつくりはすべてが異なり、個性的です。



神田川に右折すると上空を覆う高速道路から解放され、日本橋川沿いの濠端のような景観から谷間のような景観に変化します。さて急流でもない川の両側が切り立った岸壁になるのはなぜか？ 実は現在の神田川は、江戸時代に日本橋川が度々江戸城周辺に氾濫をもたらしただけで、その水を隅田川へ迂回させるべく、駿河台地を切り通してつくった人工水路なのです。



左岸に続く段丘状の緑地には中高木が混在し、高い護岸の圧迫感を和らげて、対岸からは豊かな緑塊となって見えます。駿河台を抜けてさらに東へ進むと両岸は低くなり、万世橋に至ると護岸の高さは日本橋川沿いと同程度の4mほどになります。この辺りは江戸時代にはうなぎがよく採れ、うなぎ屋が軒を連ねたとか。浅草橋までそんな往時を彷彿とさせる屋形船、釣りが並ぶ風景がつつきます。



隅田川に出て川幅が広がると、水辺に降りられるような段状の河岸が目立つようになります。時折り京都の川床料理のように川に面したレストラン、カフェが見られるものの、水辺に向かって開いた建物は少なく、逆に水辺が建物側に食い込んでいくような水景も全くありません。こうした現状は欧米の都



市のウォーターフロントには随分と後れを取っています。これを改善するには土木と建築を隔てる法規制の改革と共に、船着き場を建物に組み込むなど、水上交通の発達と建物との連携が欠かせないと感じます。

隅田川から日本橋川へ戻るには、支流の亀島川をさかのぼりました。亀島川には、隅田川側の河口に東京湾水位の基準点のある亀島川水門、日本橋と分流するところに日本橋水門があり、高潮から守られています。そのためほかの湾岸エリアより1m程護岸が低く、夕刻になると潮位が上がって橋の下をくぐれなくなるそうです。この低さを生かしてボートの係留所を設けたり、葦を植えるなど親水護岸として造園的な修景がなされており、「歩きたい」と感じさせる水辺の風景が生まれています。架かる橋はすべて低く薄く、上を歩く人と触れ合えそうなくらいです。こうした親水空間が水門の技術に支えられていることは忘れてはならないでしょう。



東京には往時をしのぼせる興味深い風景がいろいろとところに隠れています。もっと水景を生かした「海を見る」建物、カフェ、公園等が増えてくれば、逆に水上側から見て街が魅力的に見える、陸地と水が対話するような関係ができてくるでしょう。